

平成22年5月24日  
卓話 『米国と日本』

民間外交推進協会 顧問  
東京六本木ロータリー・クラブ会員

斎藤 邦彦 様

今日は米国と日本というタイトルでお話しします。

まず米国ですが、その地位はブッシュ政権の間にかなり低下しました。ブッシュの自分の価値観を人に押し付ける外交政策の結果、多くの国を敵に回してしまった。オバマは外交政策ではブッシュと正反対の国際協調重視で、それなりの成果を上げたと思っています。ロシアとは戦略核兵器削減交渉がまとまり、イラクでは曲りなりにも選挙が行われ、イランとはスムーズではありませんが話し合いが行われています。オバマは米国のみならず世界にとっての希望の星。多様な価値観を認めるのは強国のリーダーとしてふさわしいと思っています。

次に日本です。私は、我々日本人が日本を見る目よりも遙かに国際社会は日本を大きな存在として見ていていると思いますし国際的な評価も高い。何といっても豊かで自由ですし、社会の規律は世界のトップクラス。と言い続けてきたんですが、最近ちょっと声が小さくなってきました。最近の日本はちょっと民族の活力が低下しているかなという気がします。

本来のテーマの日米関係の話に移ります。日本が独立を回復した時、米国との同盟関係を日本外交の基軸として選びました。日本の安全はアメリカの抑止力に頼る方針をとったわけです。それ以来60年、日本は平和を共有し繁栄してきました。日米は基本的には良好な関係が保たれてきたと思いますが、民主党政権になってから大変ぎくしゃくしています。私は普天間問題がうまくいかなくても日米関係全体が壊れることはないと思いますが、残

念ながらアメリカの鳩山総理、鳩山内閣に対する信用は全く地に落ちています。

私は鳩山さんという方は面と向かった相手に調子いいことを言ってしまう人だと思います。これは外交では最悪です。致命的なのが11月にオバマ大統領が来られた時、普天間の件でオバマ大統領の記者会見を聞くと、明らかにオバマ大統領は、首脳会談で2006年に自民党がつくった現行案で今年中に決着すると鳩山さんから言われたという、少なくともその印象で記者会見をやった。鳩山さんは翌日シンガポールで、現行案には拘らない、決着は急がないと言って、これにはアメリカ側は非常に驚いたと思います。こういうことが続くと、最も恐ろしい事態は、アメリカが、もう日本はいいやということになって、フィリピンからアメリカが基地を引き揚げた翌年、中国が領土紛争のあった南沙群島を占領してしまったようなことが起こらなければいいと思っています。

日本はもちろん捨てたものじゃないし民族の資質は世界に冠たるものである。最近僅かですが、ゆとり教育の見直し、消費税の議論を始めようという、まともな議論も起こっておりますので絶望することはないというのが私の結論です。

暗い話で失礼をいたしました。

